

第5章 運転者が認知症になったとき

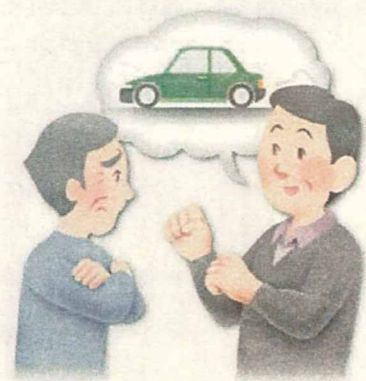
1 自動車を運転している方に、認知症が疑われる場合には、早めに医療機関を受診し正確な診断を受けましょう。

認知症には、アルツハイマー病や血管性認知症などのような、いくつかの原因疾患があり、それに伴う様々な症状があります。まずは、正確な診断により、病名と症状を知りましょう。次に、病気が運転にどのように影響するのかについて、主治医からよく説明を聞きましょう。



2 認知症の患者さんは、安全に運転することが徐々に難しくなります。患者さんを含め、ご家族・関係者で話し合い、このことをよく理解することが重要です。

認知症という病気により、運転の制限や中止が必要になることについて、運転者が納得し、できればご本人の意志で、運転を中止してほしいと願うでしょう。そのためには、ご本人を含めご家族や関係者で、早い段階から、何度か話し合いをもつことが大切です。



患者さんにとっての運転の「目的」や、運転することの「意味」を確認しましょう

- ▶ご家族で、運転する患者さんの思いを共有し、協力して運転中止に取り組むことができます。
- ▶運転中止後の自動車の代わりとなるものは何かについて見極めるための、重要な情報となります。

■患者さんにとっての運転の目的や意味は何か？

移動手段
あるいは
楽しみ・生きがい？



仕事に使用
あるいは
通院に使用
あるいは
買い物に使用？

■「運転」の代替を検討する

自動車が移動手段として必要である場合

代わりの移動手段を見つける必要があります。運転の行き先・目的に応じて、自動車の代わりとなる交通機関を確認してください。

- 家族・友人・知人で、代わりに運転してくれる人はいますか？
- お住まいの地域に、公共交通機関や移動サービスはどのようなものがありますか？

また、お住まいの地域で公共交通機関の高齢者優待乗車証や移動サービスを提供している場合がありますので、市区町村の役場窓口（高齢者福祉・介護関係）に尋ねてみるとよいでしょう。

（ただし、サービスの対象者が、要介護認定を受けている方など限定されていることや、利用できる区間・地域が限定されていることもありますので、注意してください。）

■ 公共交通機関

（バス、コミュニティバス・循環バス・巡回バス・福祉バス、タクシー、電車、地下鉄、路面電車、船舶など）

■ 病院や福祉施設の送迎バス

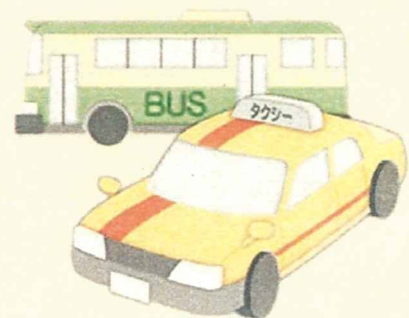
■ 乗合バス・デマンドバス（予約制乗合バス）

■ 乗合タクシー・デマンドタクシー（予約制乗合タクシー）

■ 介護タクシー・福祉タクシー

■ 自家用有償旅客運送

（市町村やNPO法人等による有償の運送サービス）
その他の移送サービス



※自転車・シニアカー（電動カート、電動三輪車・四輪車）・電動車いすは、認知症患者さんにとって、必ずしも安全な乗り物とはいえません。

- ➡ ワンポイントアドバイス「（自動車の代わりとしての）電動車いすや自転車の利用について」（p31）を参照してください。

運転することが楽しみや生きがいである場合

運転以外に、患者さんの好みに合うような楽しみや生きがいとなる活動を、地域で探してみましよう。

お住まいの地域で、このような活動やサービスを聞いたことはありませんか？近所の方やご友人に尋ねてみたり、お住まいの市区町村の役場窓口で尋ねてみるとよいでしょう。

- 生きがいづくり活動、デイサービス
- 老人クラブ、敬老会
- 介護予防教室、もの忘れ・認知症予防教室、閉じこもり・転倒予防教室
- 趣味の講座、娯楽の場
- 運動・体操、健康づくり教室
- ふれあいサロン、いきいきサロン、茶話会
- 生涯学習、教養講座
- 住民交流・世代間交流
- ホームヘルプサービス、見守りサービス、外出支援サービス
- 入浴・温泉施設への送迎付きサービス
- 宅老所、福祉センターでの活動
- 貸農園での活動
- シルバー人材センター、事業団登録、伝承活動



3 運転中止に拒否的である場合や、突然の運転中止によって、患者さんの意欲低下の恐れが強い場合は、まず、家族が同乗し、定期的に運転行動を観察するようにしましょう。また、安全に運転していると思われる場合にも、定期的な観察をして、チェックすることが大切です。

運転チェック

認知症が原因で、失敗することの多い運転行動について、観察しましょう。

以下の6項目について、特に注意して観察するようにしてください。そして、こうした運転がみられた日付をメモしておきましょう。その時の患者さんの様子などもメモしておくと、後で、主治医や警察署・免許センターに相談するときに役立ちます。

運転チェック	日付	日付	日付	気づいたこと
1. センターラインを越える				
2. 路側帯に乗り上げる				
3. 車庫入れ(指定枠内への駐車)に失敗する				
4. ふだん通らない道に出ると、急に迷ってしまう				
5. ふだん通らない道に出ると、パニック状態になる				
6. 車間距離が短くなる				

(熊本大学医学部 池田学教授 作成)

上の6項目の運転状況は、年をとっただけで増えてくる失敗というわけではなく、認知症という病気のためにさらに起こりやすくなる失敗です。1つでも繰り返して起こすようなときは、交通事故を起こす確率が高く、危険であることを示すサインです。患者さんも理解した上で運転を中止できるように、粘り強く説得しましょう。

4 相談窓口～運転中止がうまくいかないとき～

家族の話し合いでは解決できない問題があるとき、あるいは、どうしても患者さんが運転中止を拒否し、うまくいかない場合には、専門の機関に相談しましょう。事前に、電話などで担当者に事情を説明しておくことも有効です。

警察署、 免許センター

- 運転技能や運転免許についてなど、
運転にかかわる全般的なこと

運転適性相談窓口があります(認知症やその他の病気のために運転に不安がある場合などに、免許の更新について相談できます)。



病院、 診療所、 認知症疾患 医療センター

- 認知症のこと
- 患者さんへの接し方
患者さんが運転しており、
不安な場合には、主治医
にも相談してみましょう。



市区町村の役場 高齢者福祉・ 介護関係の窓口

- 移動・外出支援サービスのこと
- 介護保険サービスのこと
- 高齢者福祉サービスのこと



その他、社会福祉協議会やシルバー人材センター、NPO法人(特定非営利活動法人)などで、移動・外出支援サービスを提供している場合もありますので、調べてみましょう。

■ 公共交通機関の乏しい地域にお住まいの場合

ご家族が同居している場合には、週末の買い物などに一緒に出かける工夫をしてください。高齢者の一人暮らしや高齢者のみの世帯では、地域の隣人や友人に、移動の援助を依頼しておくとい良いでしょう。

あるいは、食材や生活用品の宅配サービスを実施している業者がありますので、利用を検討してみてもいかがでしょうか。また、お住まいの地域に、移動支援サービスや、買い物等の外出を支援するサービスがあるかもしれません。一度、市区町村の役場窓口に尋ねてみてください。

■ 経済的な理由により運転中止が困難な場合

経済的な理由(たとえば、仕事を辞めることで収入が一切なくなる)により、どうしても運転を継続しなければならない場合には、できるだけ初期の段階で、患者さんが自動車を運転する必要のない生活に変えるなどの対応が必要です。そのためには、家族や知人などの周りの協力や支援が重要ですが、家族などの頼れる人がいない場合もあるかもしれません。おひとりだけで悩まず、お住まいの市区町村役場やお近くの地域包括支援センター、あるいは、地域の「認知症高齢者や家族を支える会」に相談するようにしてください。

■ 「鍵隠し」「車隠し」は最後の手段

運転を中止させるために、鍵や車を隠すことは、ご本人の興奮や被害妄想を悪化させ、**逆効果になる**ことがあります。認知症であっても、早期の段階で、ご本人と話し合い、きちんとした説明や納得を得られるような工夫が必要です。自動車の処分は、最後の手段と考えましょう。

■ 飲酒について

運転中止後に飲酒量が増えたり、過食行動や外出の欲求が増えたりする場合があります。その場合は、デイサービス・デイケアの利用やご家族がドライブに付き合う、趣味活動を取り入れるなどの行動に置き換えていく対応も効果的です。

■ (自動車の代わりとしての)「電動車いす」や「自転車」の利用について

電動車いすや自転車を、自動車の代わりとしてはどうか、とお考えになることもあるでしょう。しかし、認知症のように、認知機能が低下したり身体機能が低下したりする病気の場合、電動車いすや自転車の運転にも支障が生じるため、交通事故に遭う危険性が高くなり、お勧めできません。なるべく、公共交通機関や地域の移送サービス等、ご本人が運転操作をしない状況で、移動・外出を支援するようにしましょう。

運転中止に納得した患者さんが、忘れてしまうことを防ぐために

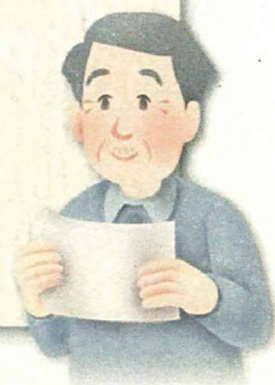
患者さんは、運転を中止したことを忘れてしまい、また運転しようとしてしまうかもしれません。そのようなときには、主治医に次のような文書を作成してもらうことも有効です。



〇〇〇〇さん

あなたは、もの忘れが始まっていて、安全に運転することが難しくなっています。このような場合、運転を続けることは危険であると、法律にも定められています。運転を中止するよう準備をしましょう。

〇△病院 医師 □□□□



ご自宅の目に付くところに貼って、患者さんが運転しようとしたら、こちらを見て頂き、「主治医の先生にこう言われて、運転を中止すると約束したでしょう。」と説明してください。

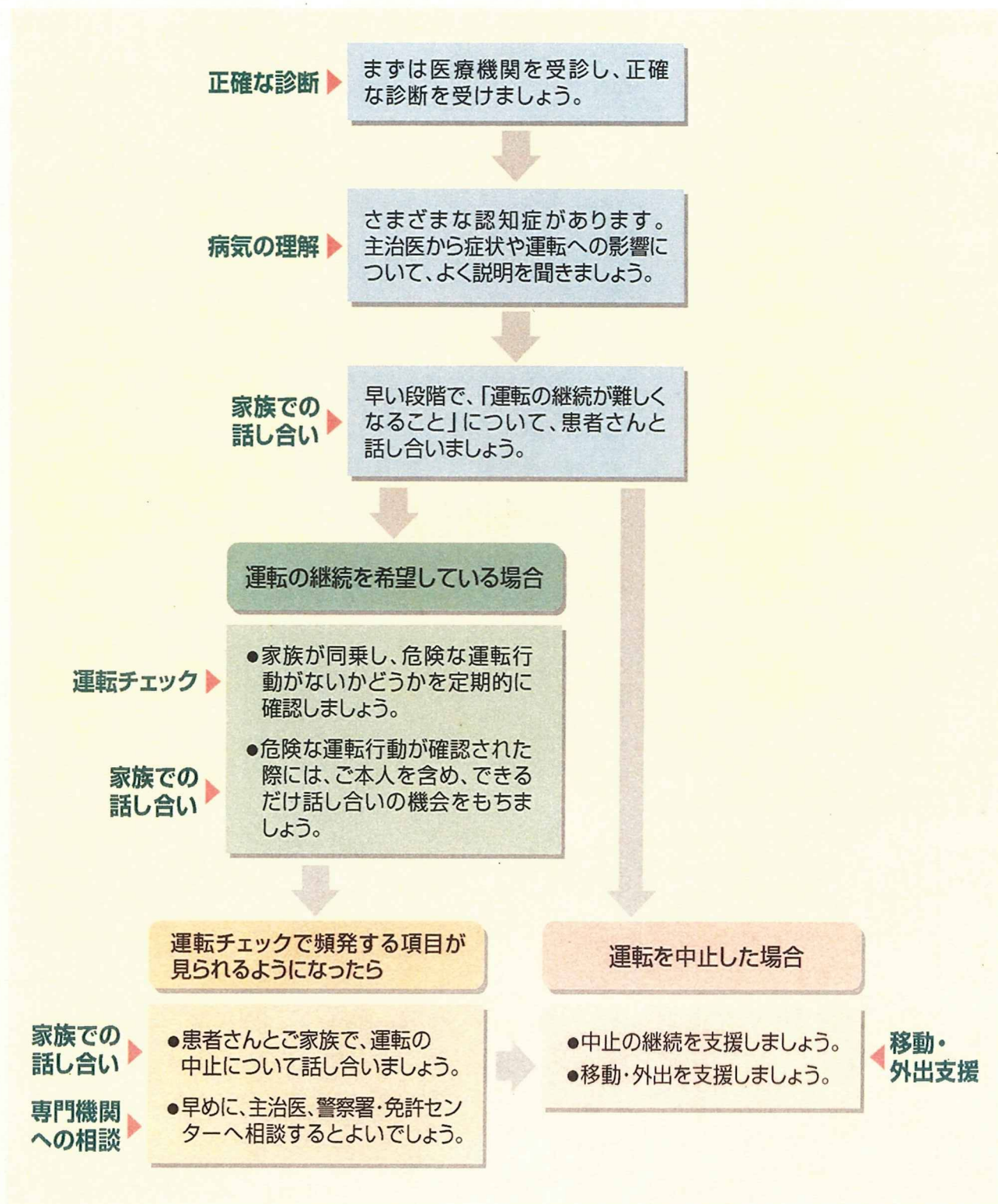
患者さんが、長年続けていた運転を中止したことは大きな決断であり、また中止を続けていることも、ご本人にとって我慢の連続であることでしょう。ご家族は、ぜひ、患者さんの努力と判断に対して、言葉をかけ
ねぞら
労ってください。ご家族からの温かい言葉がけは、患者さんの気持ちを穏やかにし、自信にもつながります。



フローチャート

認知症高齢者の自動車運転への対応、考え方

●自動車を運転している方が認知症かもしれない、という心配が出てきたときに、参照してください。



memo

A large rectangular area with horizontal lines, intended for writing a memo.



認知症高齢者の
自動車運転を考える

家族介護者のための
支援マニュアル[®]

認知症高齢者の安全と安心のために

増える認知症ドライバー

免許返納に抵抗感

中卒を越えても
目覚めが早い。事故を
起こしたことを覚えて
いた。認知症ド
ライバーの増加は
ペースが速い。低
年齢層の増加は
下し、高齢層の増加
は、高齢層の増加は
つなげられず、運
転を止めないと
願う家族が多い。本
人どうも自信はな
いという。

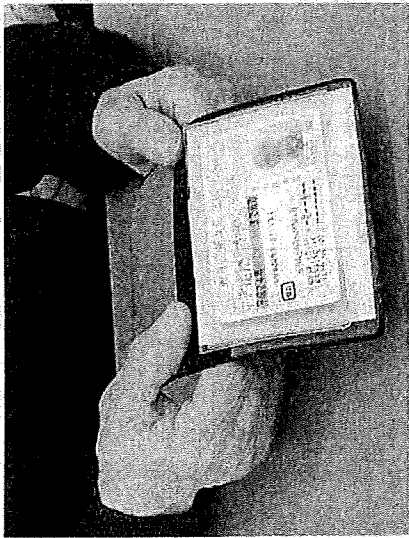
警察は2009年時点
で、運転免許を持っている
認知症の高齢者数を80万人
と推定した。国土交通省の所
属の認知症高齢者対策推進課
は、免許保有者の高い増加
世代が高齢になり、さらに
増えていると推定している。
「認知症高齢者運転行動
調査」の結果、認知症高齢者
は、認知症高齢者運転行動
調査の結果、認知症高齢者
は、認知症高齢者運転行動
調査の結果、認知症高齢者

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

生きがい見つけて

精神的フォロー必要

認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に



「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーが 多くおられる特徴

- どこへ行くかかららない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車間距離をとる気配がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

【出典：国土交通省の所正文教授(高橋トヨタ)】

夫が運転けられたが、正
確な知識は難しいといわれ
る。日本交通心理学会の運
転心理学部長の石川浩也。
中央自動車学校(盛岡市)
社長は「親しい場合は、
年齢に無関係に認知症発
症を受けとらざるを得ない
と認める。

ただ車は、本人の知ら
ない間に売却。しかし去年
9月、免許を更新する際
に70歳以上の人は求めら
れる認知症検査を行うこと
になった。一美さんは「教
習所に『不合格』と書い
ておいたからだ」と後悔す
る。

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

坂本一美さん(仮名)は
1年前、夫の運転免許を
更新する際、75歳以上の高
齢ドライバーに認知症検査
が義務づけられたことを受け、
1週間ほど悩んだが、家族
の勧めで、認知症検査を受
け、合格した。しかし、夫
の認知症は進行しており、
運転に自信がなくなり、
運転を止めたいと考えてい
る。家族は、夫の運転を
止めたいが、夫は運転を
止めない。家族は、夫の
運転を止めたいが、夫は
運転を止めない。家族は、
夫の運転を止めたいが、
夫は運転を止めない。家
族は、夫の運転を止めたい
が、夫は運転を止めない。

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

「認知症の人と家族の
会」神奈川支部は昨年9
月、金澤市を会場に「ク
ロノス」を開催した。市
加代子さんは「何十年も無
事故で運転に自信を持って
いるが、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に
は、認知症の増加に

認知症 ドライバー

判断力や行動手エツクを

認知症ドライバーは 多くみられる特徴

- どこへ行くつもりなのか
が分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センサーラインを越えて走行
運転する
- 交通標識や信号などの交通規
則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がな
くなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国土師大の所正教授
「高齢ドライバー-激増時代など」)

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた一。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめたいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。



「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土師大の所正教授(交通心理学)は、写真1は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある」と指摘。研究の蓄積も乏しく、「どうい
う症状が
運転行動
にどう結
びつくの

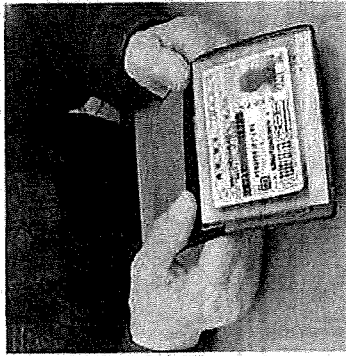
高齢者は免許返納に抵抗感

運転の意味 家族で考えて

委員長を務める石川淳也。中央自動車学校(盛岡市)社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と語る。

坂本一美さん(74)は「娘名」は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハ



「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

か、そのためどう
いう検査を関するべ
きか、まだ分からな
いことは多い」と話
す。

昨年6月から運転
免許を更新する際、
75歳以上の高齢ドラ
イバーに認知機能検
査が義務付けられた
が、正確な判断は難
しいといわれる。日
本交通心理学会の運

イマー型認知症と診断され
たからだ。山小屋暮らしに
必要だった車は、本人の知
らない間に売却。しかし夫
は昨年5月、免許を更新す
る際に70歳以上の人に求め
られる高齢者講習をクリア
してしまつた。「一美さんは
「教習所に『不合格』と言
つてもらいたかつた」と後
悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)は、脳血管性認知症
になった父(88)を
免許の更新を拒否する
よう説得した。父は
坂道でサイドブレー
キをかけずに駐車し
自分の車にひかれる
などの事故を起こすよつこ
なつていて「他人を巻き込
まない方がいい」との家族
の忠告を渋々受け入れた。
隆さんは「身近な家族の話
は聞かないことが多い。第
三者に言われた方が効果
があるかも」と語る。

国立長寿医療センター長
寿政策・在宅医療研究部の
荒井由美子部長らの厚生勞
働科学研究班は、認知症の
基礎知識や事例に基づいた
対処法、運転行動のチェッ
ク項目などをまとめた、家
族のための支援マニュアル
を同部のホームページ上で
公開、全国の自治体にも配
布する。

荒井部長は「運転する意
味や目的を考え、運転以外
の生きがいや移動の手段を
見つけることが大切だ」と
話している。

「認知症高齢運転者」の 介護者支援マニュアル

国立長寿医療センター

国立長寿医療センター
は、「認知症高齢者の自
動車運転を考える家族介
護者のための支援マニ
ュアル」を、8日からイ
ンターネットで無料ダウンロード配布する。高齢運転者が認知症になった場合、どこに相談したらいいか分からないと悩む家族介護者も多いのが現状。同マニュアルは、認知症に起因する運転時のリスクや運転継続が望

ましくなくなった場合の対応など、これまでの研究で得た成果を具体例を交えて紹介している。支援マニュアルは、同センター長寿政策・在宅医療研究部ホームページ（<http://www.nils.go.jp/department/dsp/index-dsp-j.htm>）でダウンロードできる。

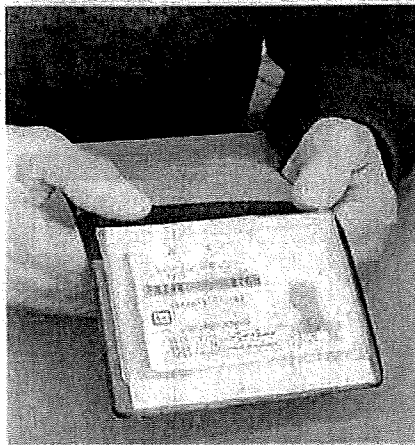
中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバー

警察庁は2005年時点で、運転免許を保持している認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土館大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があるとの指摘。研究の蓄積も乏しく、「どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、まだ分からない」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動

免許返納に抵抗感



坂本（仮名）の認知症な夫が手にする更新された運転免許証

精神的フォローが必要

車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の間、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話ることは自立の象徴。簡人田村加代子さんは「何単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん（74）は「一言に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行くつもりなのか分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車間距離をとることがなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国土館大の所正文教授など）
（高齢ドライバーの激増時代）

夫がアルツハイマー型認知症と診断されたから、山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。

岩手県の佐藤隆さん（54）は、「脳血管切だ」と話している。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけていることが大

性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけたままの車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

運転する意味や目的を考え

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめしてほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバー

警察庁は2005年時点で、運転免許を保持している認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土交通省の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会 神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡

単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。坂本一美さん（74）は「坂本一美さん（74）は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は控車でサイドブレーキをかけるに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を巻き込まない方がいい」との家族の警告を涙を受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

第三者の忠告が効果的

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車

単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。坂本一美さん（74）は「坂本一美さん（74）は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は控車でサイドブレーキをかけるに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を巻き込まない方がいい」との家族の警告を涙を受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」を同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つめることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行くつもりか
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行
- 運転
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気にならなくなる
- 車庫入れができなくなる
- 逆走する

（出典：国土交通省の所正文教授「認知症ドライバー」渡邊博代氏など）

返納に抵抗感 家族の支え大切

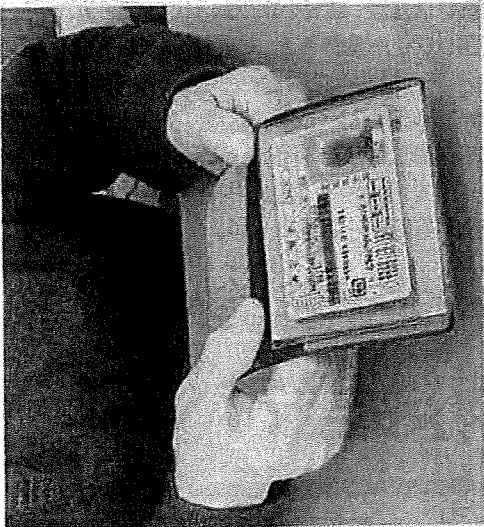
認知症と運転免許

中央線を越えても目覚めない。事故を起こしたとまでなっていた。認知症タイプの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるおそれ、運転をやめほしいと願う家族が多い。本人どうして回復を望んでいるのか。

警察庁は2005年時点で、運転免許を保持している認知症の高齢者数を30万人と推定した。国立第1の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている

可能性があるとの指摘。研究の蓄積も乏しく「どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、また分からないことは多い」と話す。昨年6月から運転免許

を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられた



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーは「多くみられる特徴」

- どこへ行くつもりと分らない
- 事故を起こしたことや蛇行を忘れてしまう
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号など、交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

【出典：国立第1の所正文教授（高橋博士）「高齢ドライバー」】

代替手段見つけて

が正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けたいと思う」と語る。「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会費を対価にメンケイトを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのはなく、精神的サポートや代替手段が必要だ」と語る。坂本一美さん（仮）は仮名は1年半前、夫（仮）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山梨屋敷らしに必要だった車

は、本人の知らない間に売却。しかも夫は昨年8月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をうけずしてしまった。「一美さんは「教習所に「不合格」と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤さん（仮）は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を促さず認めず。父は強迫でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を幾度か受け入れた。佐藤さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」を同部のホームページ上で公開。全国自治体にも配布する。荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動手段を見つけてもらうことが大切だ」と話している。

運転以外の生きがいを

認知症ドライバーどう対処？

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土領大の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく、どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにもどういった検査を開

は難しいといわれる。

日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校(盛岡市)社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。

精神的フォローも必要

発すべきが、また分からないことは多い」と語る。

正確な判断難しく

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断

世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と語る。

坂本一美さん(74)「仮名」は1年半前、夫(76)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの

夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「講習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

忠告を渋々受け入れ

岸草真の佐藤隆さん(54)「同」は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まな

い方がいい」とどの家族の忠告を

渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と語る。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいを、移動の手段を見つけていることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーは多くみられる特徴

- どこへ行くとうとしていて、何が分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができなくなる
- 逆走する

(出典：国土領大の所正文教授(高齢ドライバー・激増時代など)



所正文 国土領大教授

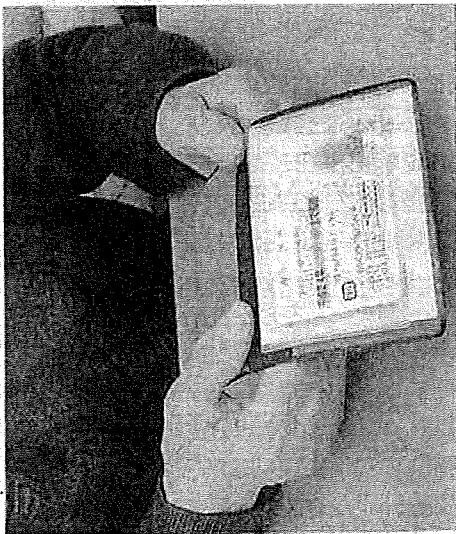
認知症と運転免許

返納に抵抗も 家族が支援を

中央線を越えとも自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転を止めほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

75歳以上に検査義務

正確な判断は困難



「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

警察は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土第1の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういった症状が運転行動につながるのか、そのためにどういった検査を課すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。「認知症の人と家族の会」神奈川支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何

十年も無事故な運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。一高輪君にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だと話す。坂本一美さん(仮名)は「一年半前夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年1月免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまっ

(54)＝同氏は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は撥道でサイドブレーキを引かず、勝手に自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を巻き込まない方がいい」とこの家族の歴史を淡々と受け入れた。隣人は「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識と事例に基づいた対応法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」同部のホームページ上で公開。全国の自治体にも配布する。

認知症ドライバーは「信」多くみられる特徴？

- どこへ行くつもりとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気にならなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国土第6の所正文教授「高齢ドライバー―激増時代―」など)

中意識を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故に「なおりかぬ」運転を止めほしいと願う家族は多い。本人どう回復を急ぐべきなのか。

認知症ドライバーは どう“引退”させる？

認知症ドライバーは 多く知られる特徴

- どこへ行こうとしていないのか
 - 自分が知らないことを覚えている
 - 事故を犯したことを覚えている
 - セーターラインを越えて蛇行する
 - 運転する
 - 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
 - 一定の車間距離をとることがなくなる
 - 車庫入れができない
 - 逆走する
- (出典：国土交通省の所正論文「認知症ドライバー」)

◆推定30万人

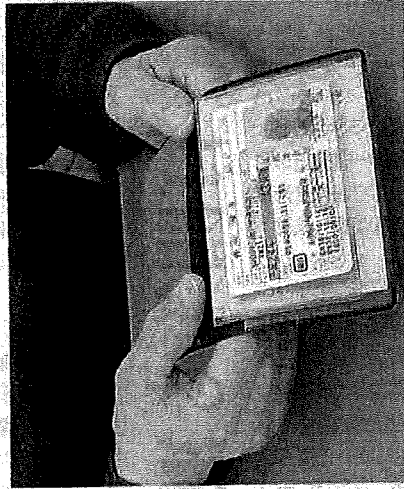
警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土交通省の所正論文「認知症ドライバー」は、免許保有者の約10%は認知症と推定し、さらに増えている可能性があるとしている。研究の進展も早く、「どういった症状が運転行動にどう影響するのか、そのためどういった検査を開展すべきか、また分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーには認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の理事長を務める中山博也・中央自動車学校(岡崎市)社長は「健忘の場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と話す。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年8月、会館を改装しアンケ

第三者が忠告／運転以外に生きがい

抵抗感なくすフオローを



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

に急進した。世話人・田村和代さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フオローや代替手段が必要だ」と話す。

◆家族よりも

坂本一美さん(仮) 64歳は1年半前、夫(仮)の退職後に移り住んだ山梨県が

神奈川県に居つきました。車好きの夫がクルマにハマり認知症と診断されたが、山小鷹暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に75歳以上の人に求められる高齢者講習を受けようとしてしまった。一美さんは「講習に『不承諾』と言ってもらいたかった」と後悔する。

山梨県の佐藤隆さん(54) 尚且、脳血管性認知症

になつた父(88)を、免許の更新を風送るよう説得した。父は我慢できず、自分の車にひかれるなどの事故を繰り返すようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を徐々に受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

◆アンニエール

国立長寿医療センター長 委政策・在宅医療研究部の荒井美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対応法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援アンニエールを同部のホームページで公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考えた、運転以外の生きがいや移動の手立てを見つけることが大切だ」と話している。

「免許」の返納 どう勧める？

認知症ドライバーと向き合う家族

認知症ドライバーは 多くみられる特徴

- どこへ行くとうと知っているのか
- 事故を起こしたことを忘れる
- センタースタインを越えて蛇行
- 運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守れない
- 一定の車間距離をとる気にならなくなる
- 車庫入れができていない
- 道迷う

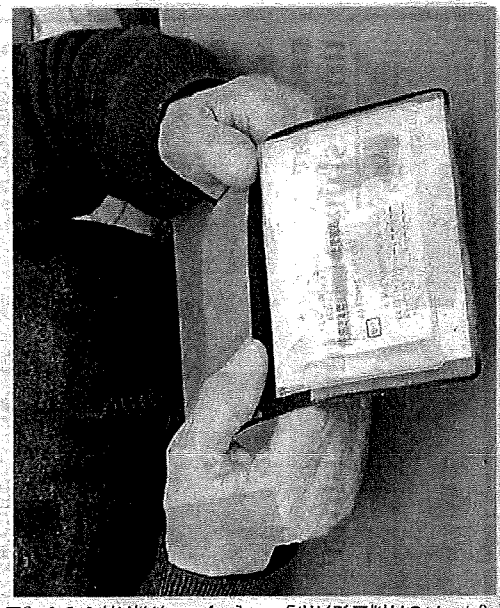
中央競馬場でも目撃された。事故を起したことを忘れていた。認知症ドライバーの事故は、記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるおそれがある。運転を止めようという願望は多い。本人どうして回復を望んでいるのか。

警察は2006年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土院大の所正文教教授(交通心理学)は、免許保有率の高い田舎世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある。研究の蓄積も乏しく、「こういう症状が運転行動とどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

厚生労働省の調査委員を務める石川淳也・中央自動車学校(盛岡市)社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知症検査を受けさせるべきだ」と語る。「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世語人田村加子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「運転者にとつて運転を続けることは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が重要だ」と話す。

代替手段提示が大切

坂本一美さん(71)は1年半前、夫(76)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。小山慶寿ら本人の知らない間に荒



却。しかし夫は昨年1月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証。国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学

第三者の説得も有効

同じく、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を促さずと認めた。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を養育してきた方がい、この家族の忠告を徐々に受け入れた。慶さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われる方が効果があるかも」と話す。

研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のためのマニュアルを同部のホームページ上で公開。全国の自治体にも配布する。荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つめることが大切だ」と話している。